

## トイレットトレーニングにおける排泄自立へ向けた幼児の行動特徴

## Behavior of toddlers for excretion independence in toilet training

山藤 宏子 (Hiroko Yamafuji) 指導：根ヶ山 光一

**【問題と目的】** 幼児期における「おむつ外し（トイレットトレーニング）」は、離乳に続く子育ての大きな課題となっている。子どもの排尿機能の発達的变化は見えにくく、生活年齢がトレーニングの目安になりがちであることが母親たちに多くの不安を与えている。本研究では、トイレという新しい環境で、排泄という新しい行動を身につけるまでの子どもたちを観察することで、排泄の自立を正しく理解し、トイレットトレーニングに効果的な手法を検討し、保育士や母親の負担軽減に繋がる提案を行うことを目的とする。

**研究1 保育園及び家庭でのトイレットトレーニングの実態**

**【目的】** 大きく環境が違うそれぞれの場所で、どのような方法でトイレットトレーニングが行われているのか、実態を把握する。

**【方法】** 都内認可保育園2歳児クラス21名のトイレットトレーニング場面の参与観察と2歳児を養育中の専業主婦の母親35名に対してメールによる質問紙調査を行った。

**【結果と考察】** トイレットトレーニングの開始の基準が保育園と母親で大きく違っており、家庭で養育される子どもは保育園児に比べ、パンツへの移行が1年ほど遅いことがわかった。紙おむつの利便さ・快適さに加え、おむつが外れることによって育児がより大変になると想像している母親が60%もいることが、家庭でのトイレットトレーニング開始を遅らせている原因になっていると考察された。

**研究2 トイレットトレーニング中の子どもの行動**

**【目的】** トイレットトレーニング中の子どもたちの行動を観察し、自立の過程を考察する。

**【方法】** 都内の認可保育園1歳児クラス、2歳児クラスの合計42名の園児と、家庭で養育されている2歳児5名のビデオ撮影を行い、動画解析ソフト（ELAN 4.9）を使用して分析した。

**【結果と考察】** トイレットトレーニング中の子どもたちは便器に視線を落とし、排泄の瞬間を「見る」行動を発現させていた。女子に比べ男子の見る行動生起が多く、排泄器の形状などが影響している可能性が考えられた。便座に座ってから排尿開始までの時間と子どもの月齢は、「見ない」行動については相関があり ( $r=-.456, p<.01$ )、「見る」行動とは相関がなかった ( $r=.206, n.s.$ )。見る行動において視線が移動するタイミングが尿排出の瞬間より先か後かということが、便座に座ってから排尿開始までの時間と

相関があった ( $r=-.675, p<.01$ )。また、先か後かのタイミングの間には有意差があった ( $t(19)=-4.7, p<.01$ )。この行動は保育園でも家庭でも生起されており、環境に関係なく排泄の自立に向けての重要な行動であることがわかった。また、それは「見る・見ない」の行動に加えて、便座に座ってから尿の排出までの経過時間の長短とも関連することが示唆された。時間と視線での区分は表1のようになった。

**研究3 トイレットトレーニング場面での他者との関わり**

**【目的】** 子どもたちがどのような働きかけを受けて自立に向かっていくのかを明らかにする。

**【方法】** 研究2の排尿成功場面を抽出し、発話場面についてKJ法のグループ分けの手法を用いて分析した。

**【結果と考察】** 保育園でのトレーニング場面では自立の段階が遅い子どもが、段階の早い子どもの排泄の様子をのぞくという保育園独自の行動が観察された。家庭では、全ての事例で母親の発話を確認できた。家庭では母子の豊かな会話で、保育園児たちは仲間との「のぞき合い」で自立を促進していることが推察できた。

**【総合考察】** 発達の最近接領域の概念では、子どもの新しい習得能力は、大人か自分よりも知的な仲間との共同行為の中で発達するとされているが、トイレットトレーニングにおいてまさにその姿が観察された。生まれた直後からおむつを義務付けられてきた子どもたちはトイレットトレーニングの場面で初めて自らの身体から放出される尿や便を「見る」。随意コントロールの機能を獲得すれば、止めて「見る」、出して「見る」。言葉による情報の収集が不可能であれば、周囲の仲間の様子を「見る」行動が生起していた。このように排泄の自立に必要な情報を獲得するためには「見る」動作が重要であることがわかった。また約12秒という時間が随意コントロール獲得の指標になるかもしれないことが示唆された。以上により、トイレットトレーニングは育児書に示されているように、養育者が褒めるだけでおむつが外れているわけではないことが明らかになった。排泄機能の発達時期を見極めてトレーニングを開始し、排泄物や随意コントロールの場を「見る」機会を与えて行くことで、子どもが自らの能動性によって自立を促進させていく可能性があることが示唆された。

表1 時間と視線での排泄の自立区分

区分	視線	排尿までの時間	推測される子どもの状態
コントロール前期 (y1-long)	見る	視線→排尿	身体からの排出物の発見・確認
コントロール後期 (y1-short)		視線→排尿	セルフコントロールへの気付きの萌芽
確認期 (y2)		排尿→視線	コントロールの確認
完了期	見ない	-	大人のスタイルに近づく